2021 年度 IR 推進委員会報告書

仙台白百合女子大学

目 次

- 第1部 学生の受け入れ IR 報告・・・・・・P.1 報告者:結城 裕也、高橋 千恵子
- 第2部 教育課程と学修成果に関する IR・・・・P.8 報告者: 呂 光暁、高橋 豊

学生の受け入れ WG 報告

報告者:結城裕也, 高橋千恵子

はじめに

リクルート総研 (2021) によると、全国の 18 歳人口が 2021 年の 114.1 万人から 2033 年には 101.4 万人となり、2021 年比で 12.7 万人減少すると予測している。特に 18 歳人口の減少率が高いのは東北地方で、2021 年比で 79.5%と予測されており、以降も減少は続くと思われる。

一方で、大学進学者に目を向けてみると、中央教育審議会大学分科会将来構想部会が行なった統計によれば、2040年の大学進学者数は約51万人となり、2017年の約63万人と比較すると約12万人減少し、約80%の規模となると推計されている。一方で、2012年~2021年の大学進学率に限ってみれば、2012年の47.7%から2021年の52.9%へと5.2ポイント上昇しており、特に東北地方の上昇率は3位となっている。しかし、それでも東北地方の大学進学率は全国的に見ても低水準である。また、2021年の東北地方の地元残留率に目を向けてみると、青森県、宮城県を除く、岩手県、秋田県、山形県、福島県の4県は低水準で推移しており(22.6%-28.3%)、他県への進学割合が多い。なお、宮城県の地元残留率は56.6%であり、全国平均の44.7%からみてもそれほど低水準であるとは言えない。

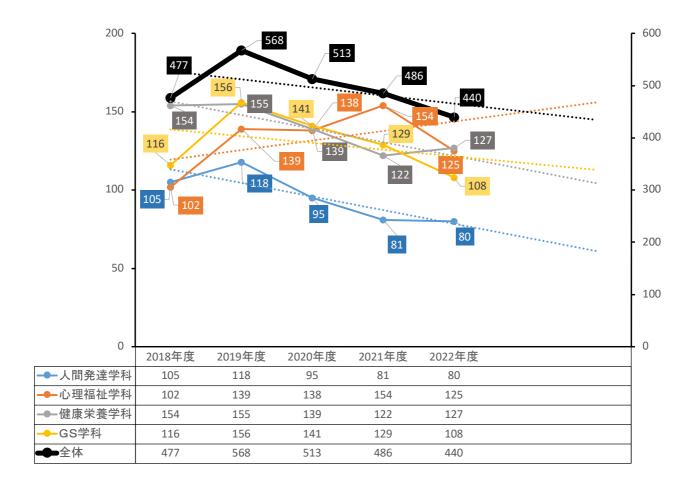
このように 18 歳人口,大学進学率,地元残留率など地域差は決して小さくはないものの,全体として大学への進学者数減少によって定員割れとなった大学は,2021 年度時点で,全国で 4 割を超えており,今後も大学の淘汰が進むことが予想される。また,2020 年 1 月にわが国で最初の新型コロナウイルス感染者が確認されて以来,コロナ禍によって社会的不確実性が高まり,今後も将来を明確に見通せない状況が続くことが予想される。

以上のような現状を踏まえ、本報告では、本学における入学試験結果やオープンキャンパス来客者数の動向を分析し、入学者数の確保に資する情報を提供することを目的とする。

なお、本報告では、以下の項目に関する分析を行った。

- 入学試験結果データからの検討
 - 1. 年度ごとの学科別志願者数推移
 - 2. 年度ごとの学科別志願者数推移(年内・年明け別)
 - 3. 年度ごとの学科別入学者数推移
 - 4. 年度ごとの学科別入学歩留まり率推移
- オープンキャンパス来客者数からの検討
 - 5. 年度別のオープンキャンパス参加者数, 志願者数, 入学者数の比較

1. 年度ごとの学科別志願者数推移

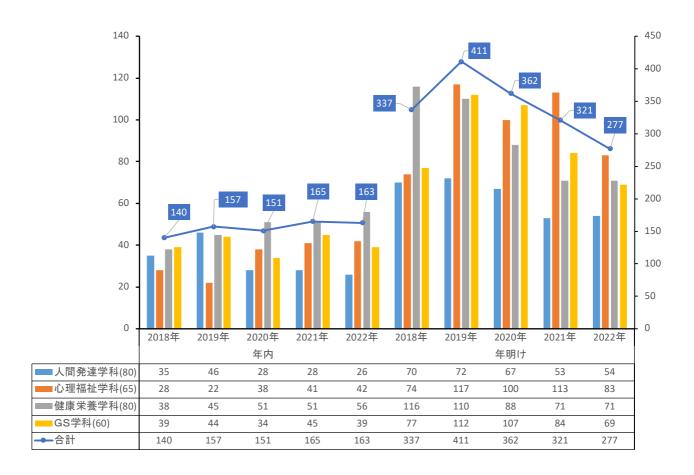


まず、2018 年度~2022 年度の5年間における学科別志願者数推移について述べる。なお、図中の点線は線形予測であり、将来的な志願者数の予測を示したものである。心理福祉学科を除き、他の3学科では2019年をピークに年々減少傾向にあることが読み取れる。同様に、線形予測においては心理福祉学科のみ上昇傾向がみられる。全体としては、2019年度の志願者数は568名で2022年度は440名であることから、2019年比で約77%の水準に留まっている。

2019 年度が他の年度よりも大幅に志願者数が多くなった理由は、2016 年から定員管理の厳格化が始まり、2018 年入試には補助金が交付されなくなる定員超過率のラインが大規模校・中規模校で抑制された結果、正規合格者を大幅に減らし難化する大学が続出した。その結果として、2019 年度の受験生マインドが超安全思考に振れたと考えられる。

2019 年度以降の志願者数の急激な減少は上記の理由が一因と考えられるが、それ以外の要因としては、コロナ禍で大学による高校訪問が行われなかったことで高校教員は大学の情報を集めることが難しく、十分な進路指導ができてない可能性や、リアル状況でのオープンキャンパスも軒並み中止になったことによって、生徒は大学研究を十分に深めることができず、自分の行きたい大学を決めきれないとの指摘もある(進研アド、2020)。ただし、2019 年から 2022 年までの間に志願者が年率で 10%程度減少し続けていることを考えれば、単にコロナ禍による影響のみならず、競合大学の動向、本学の魅力の発信不足なども考えられるため、複合的なリサーチが必要であろう。

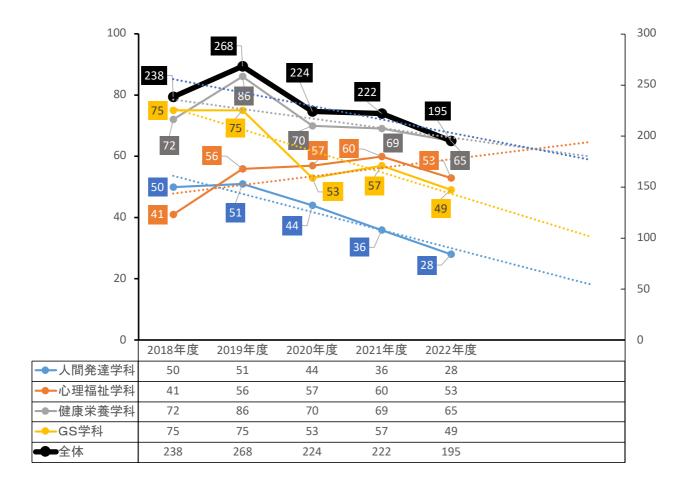
2. 学科・年度ごとの志願者数推移(年内・年明け別)



次に、2018年度~2022年度の5年間における学科別志願者数推移を、年内と年明けに分けて検討した。なお、本報告における「年内」とは、総合型選抜(旧 AO 入試) I ~Ⅲ期、姉妹校選抜(総合型、学校推薦型、学校推薦型(エンカレッジ)、特別、特別(エンカレッジ))、学校推薦型選抜の志願者数を指し、また「年明け」とは、一般選抜(A~C 日程)、大学入学共通テスト(A~C 日程)、社会人選抜の志願者数を指す。

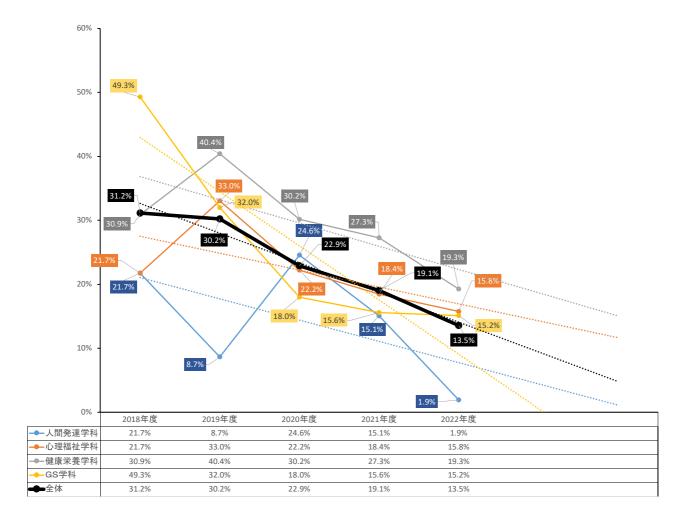
その結果、年内の選抜試験では年度ごとに多少の増減はあるものの、比較的安定した推移となっているが、年明けの選抜試験では 2019 年度をピークとして急激な減少傾向がみられる。つまり、入試の前半では、本学を第一希望とする志願者数自体は決して多いわけではないものの、社会情勢やコロナ禍、他大学の動向等の影響は今のところ限定的であると考えられる。その一方で、後半の志願者数が大きく右肩下がりになっていることから、これまで第一希望の大学に不合格となった際の第二、第三の受け皿として本学が選択されていたが、その様子が変化してきていることが読み取れる。これは受験生を抱える各家庭において、コロナ禍による経済的負担を軽減するために併願校を減らし、入学検定料を抑制したことが一因と考えられる。しかし一方で、志願者数が前年比で増加に転じた大学も存在している。これらの大学で共通する点として、コロナ禍における経済環境悪化への対策で入学検定料の無料化または減免するなどの対策が見られている(駿台、2022)。このことから、現在の入学検定料減免の拡充及び貸与・給付型奨学金の拡充を含め、金銭的サポートについて検討する余地はあると思われる。

3. 学科・年度ごとの入学者数推移



次に、2018 年度~2022 年度の 5 年間における学科別入学者推移について検討する。こちらも学科別志願者数推移と同様に、線形予測においては心理福祉学科のみ上向いているものの、全体としては今後も入学者数は減少していくことが予測される。また、2022 年度においては 4 学科すべてで減少に転じている。近隣競合校においても志願者数、入学者数の推移は本学と同様に減少傾向であることから、18 歳人口の減少、新型コロナウイルス感染拡大による社会・経済的影響は無視できないものとなっている。

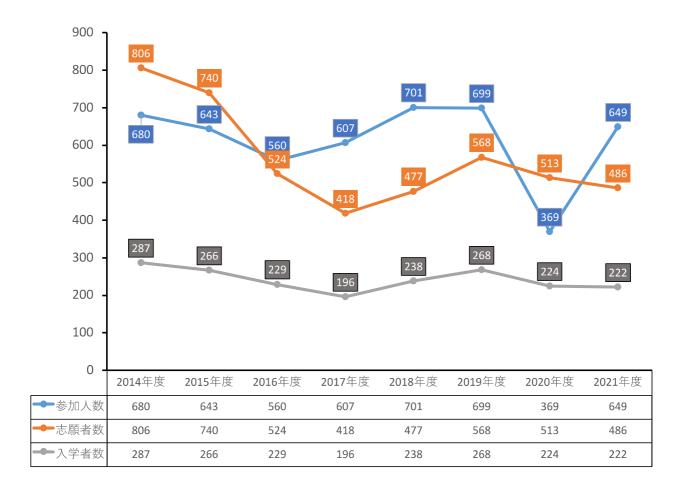
4. 学科・年度ごとの入学歩留まり率推移



次に、2018 年度~2022 年度の 5 年間における学科別歩留まり率の推移について検討する。なお、年内の志願者は総合型選抜、学校推薦型選抜中心でありほぼ入学することが前提のため、本分析では年明けの志願者のみを対象としている。

全体で見ると 2018 年度の 31.2%をピークに年々減少し, 2022 年度は 13.5%と低水準の状態である。 入学歩留まり率は志願者数, 入学者数とも関連が強い指標と考えられるが, 大学の魅力に他ならない。授業の方法, 本学教職員による質・量ともに充実した学生のサポート, 奨学金等の金銭的サポートの充実, 就職率, 国家試験合格率など目に見える実績など, 本学の魅力を積極的に発信していく事が重要となると思われる。

- オープンキャンパス来客者数からの検討
- 5. 年度別のオープンキャンパス参加者数,志願者数,入学者数の比較



次に,2014年度~2021年度の8年間における年度別のオープンキャンパス参加者数,志願者数,入学者数の推移について検討する。

全体的な特徴として、オープンキャンパス参加人数、志願者数、入学者数ともほぼ同様の変化を示しており、比較的強い正の相関関係が推定される。つまり、オープンキャンパスの参加人数が多くなれば受験者数も増加しており、結果として入学者数も増加している。ただし、2020年度には新型コロナの流行が始まったことによりオープンキャンパスの参加者数が激減しているが、むしろ志願者は他年度と比較しても多い傾向にあり、入学者数にも特に大きな影響は見られない。また、2019年度は2018年度とほぼ同水準のオープンキャンパスへの参加者数であったにも関わらず、志願者数(2018年度比119%)、入学者数(2018年度比113%)と好調に推移していた。この2点については引き続き原因を追求していく必要があろう。

まとめ

本報告では、入学試験結果やオープンキャンパス来客者数の動向を分析し、入学者数の確保に資する 情報を提供することを目的した。

入学試験結果のデータから、一部を除いて 2018 年度~2022 年度までの 5 年間という短期的なデータに過ぎないが、志願者、入学者数、入学歩留まり率ともに年々減少していることが明らかとなった。 18 歳人口の減少、新型コロナウイルスの流行など、社会・経済的要因は無視できないものの、一部堅調な本学と同規模の大学も存在することから、単に外的要因のみに帰することは適切でないと思われる。いつコロナ禍から脱却できるのか不透明ではあるが、今後通常の経済活動が再開される見通しの中、そのことが高校生や保護者のマインドにどのように影響するのかを注視していく必要があろう。「コロナ禍のために志願者数、入学者数が増えない」という受け身に終止するのではなく、授業の方法、本学教職員がどれだけ学生の成長を考えているのかといった質的な情報や、奨学金の充実、卒業後の進路など、入学してから卒業するまでどれだけ自分が成長できたのかを可視化し、本学の魅力を積極的に発信していく事が重要となる。先述したように、昨年度から志願者数増加につながった大学の特徴として、経済環境悪化への対策で入学検定料の無料化、減免化を挙げたが、それ以外にも学部・学科を新設することで志願者数が増加した大学も一部あることから、本学でも来年度からこども教育学科が開設されることに伴い、競合校との差別化をアピールする広報戦略が必要と考える。

今後はオープンキャンパスの年度・開催時期別の来場者数データや在学生が高校生の時に参加した進 学相談会等に関するデータを活用し、より広範に渡るデータ分析を行う必要がある。

参考・引用文献

進研アド(2022). http://between.shinken-ad.co.jp/hu/2022/05/shigandoko-new.html(Retrieved on July 26, 2022)

駿台(2022).2021年度入試状況分析【私立大】

https://www2.sundai.ac.jp/news/2021news/2021k_bunseki_shiritsu_univ_zougen.pdf (Retrieved on July 26, 2022)

リクルート進学総研(2022). 18 歳人口予測 大学・短期大学・専門学校進学率 地元残留率の動向 https://souken.shingakunet.com/research/pdf/202205_souken_report.pdf (Retrieved on July 26, 2022)

教育課程と学修成果に関する IR

報告者:呂 光暁 髙橋 豊

I.はじめに

大学は、建学の精神という理念の上で、独自のディプロマポリシー及びカリキュラムポリシーに基づき、自主的に教育課程を編成し実施する。この教育課程は、各大学の教育的使命や意志を表すとともに、学士としての資質・能力を学生に形成させるという教育目標を実現する担体として位置づけられる。2008年の中央教育審議会答申『学士課程教育の構築に向けて』では、大学の学士課程教育に対して、「幅広い学び等を保証し、21世紀型市民にふさわしい学習成果の達成を」学位授与の方針として、「学生が本気で学び、社会で通用する力を身に付けるよう、きめ細かな指導と厳格な成績評価を」教育課程編成・実施の方針として、それぞれ規定した。この答申の方針から、大学教育の質保証という観点において、学生の学習成果は、学士課程教育の有効性を担保するだけでなく、学位の本質を保証するものとして捉えることもできる。

また、劇的な変貌を成し遂げた現代社会は、情報化の進展に伴って、今もなお変化している。絶えずに変化する社会情勢が、人材育成を担う大学教育に対する要請もダイナミックに変わる。2012 年の中央教育審議会答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて~生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ~』では、予測困難という時代的な特徴に対応するために、「生涯学び続け、どんな環境においても "答えのない問題"に最善解を導くことができる能力」を若者や学生に形成させることの重要性が提起された。同答申で、学士課程の各専攻分野を通じて培う「学士力」の「参考指針」として、「・知識や技能を活用して複雑な事柄を問題として理解し、答えのない問題に解を見出していくための批判的、合理的な思考力をはじめとする認知的能力」「・人間としての自らの責務を果たし、他者に配慮しながらチームワークやリーダーシップを発揮して社会的責任を担いうる、倫理的、社会的能力」「・総合的かつ持続的な学修経験に基づく創造力と構想力」「・想定外の困難に際して的確な判断をするための基盤となる教養、知識、経験」の4点が示された。上記の学士力を育む学士課程教育の質的転換を図るために、質を伴った学修時間の実質的な増加・確保や、学生の学修意欲を高めて主体的な学修の確立といった方策が打ち出された。

更に、2018年11月16日の中央教育審議会『2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)』では、学修者が「何を学び、身に付けることができたのか」を明確にし、学修の成果を学修者が実感できる教育を行うことによって、個々の教員の教育手法や研究を中心にシステムを構築する教育からの脱却し、「学修者本位の教育」へ転換するという大学改革の方針が示された。

新時代の大学教育に関する上述の各種方針から、新しい社会情勢からの要請に応える上で、学士課程教育の質的転換を実現するために、学修効果を可視化し学生の主体性を担保するという取り組みは決定的な役割を果たすことが確認される。

Ⅱ.調査の目的

上記の大学教育の位置付け及び今後の社会情勢を総合的に考慮してみれば、絶えずに変化する環境において、独自の伝統を保ちつつ、時代の変化に対応しながらも、学修者本位で且つ学修効果のある教育課程を創り出して、維持するという大学の責務が確認される。特に、大学の理念や方針又は教育

者側の意図を中心に編成されているこれまでの学士教育課程を根本的に見直し、学修者本位の教育課程への転換を図る際に、教育課程を履修する学修者の主体性の担保と学修効果の可視化が、中核的な課題として挙げることができる。

大学教育の質保証を念頭に置き、2021 年度における IR の一環として、学修者の主体性の担保及び 学修効果の可視化の二角度から、教育課程の課題及び改善点を検証することを目的とした。特に、学 修者の主体性の担保という角度から、教育課程の編成原理や内容構成を俯瞰的に考察する手続きより も、本学の教育課程を実際に履修した学修者の総合評価によって教育課程の達成度を考察し、教育課 程に内在する課題を洗い出すという客観的な手続きを用いた。

Ⅲ. 調査の手続き

IR に関する取り組みを進めるにあたって、2020 年度に卒業した 4 学科の 4 年生を対象として実施された「卒業時アンケート調査」の結果と大学 4 年間の成績を用いて分析と考察を行った。卒業時アンケート調査は、4 年間の大学生活に対する満足度等を総合的に測る調査項目から構成されており、毎年 3 月に 4 年生の卒業時に実施している。2020 年度の具体的な調査内容は、以下表 1 に示す通りである。

表1卒業時アンケート調査の調査項目

		T				
番号	項目	選択肢				
I	大学生活に関連する次の8項目について、あなたの考えに一番	(4 段階)				
	近いものを選択してください。	必要				
	[大学の授業][先生との出会い][同級生との交流][人との出会	やや必要				
	い][クラブ・サークル活動][ボランティア活動][本を読むこ	あまり必要ではない				
	と][新聞を読むこと]	必要ではない				
П	次のことがらや能力(9項目)について、大学で学んで身につ	(4 段階)				
	いたと思いますか?	身についた				
	[自分の就きたい仕事に直接関係する知識・技術][幅広い知識	やや身についた				
	(政治経済、歴史、文学、芸術、科学など)][コンピュータに	あまり身についていない				
	関する知識や技能][外国語を理解し会話する能力][社会的な常	身についていない				
	識とマナーに関する知識と実践力][文章を的確に読み書きでき					
	る能力][論理的に物事を考えることができる能力][幅広い視野					
	から物事を考えることができる能力][自分の気持ち・考えを的					
	確に表現できる能力]					
Ш	次の12項目から【入学前に期待していたこと】に当てはまる	複数選択				
	ものにチェックをいれて下さい。	最大3つまで				
	[教育内容(資格取得に関係する内容)] [教育内容(資格取得					
	に直接は関係しない内容)] [教員の指導] [留学] [実習] [就					
	職] [友人関係] [クラブ・サークル活動] [ボランティア活					
	動] [設備・施設] [入学前に期待していたことはない] [その					

	他:]	
IV	次の12項目から【本学で学んで良かったこと】に当てはまる	複数選択
	ものにチェックをいれて下さい。	最大3つまで
	[教育内容(資格取得に関係する内容)] [教育内容(資格取得	
	に直接は関係しない内容)] [教員の指導] [留学] [実習] [就	
	職] [友人関係] [クラブ・サークル活動] [ボランティア活	
	動] [設備・施設] [本学で学んで良かったことはない] [その	
	他:]	
V	次の12項目から【本学で学んで期待はずれだったこと】に当	複数選択
	てはまるものにチェックをいれてください。	最大3つまで
	[教育内容(資格取得に関係する内容)] [教育内容(資格取得	
	に直接は関係しない内容)] [教員の指導] [留学] [実習] [就	
	職] [友人関係] [クラブ・サークル活動] [ボランティア活	
	動] [設備・施設] [本学で学んで期待はずれだったことはな	
	い][その他:]	
VI	大学でもっと学びたかったことはどんなことですか?	単一選択
	[就職や仕事上で役に立つこと] [私生活を豊かにするために	
	役に立つこと] [人生を通じてすべての面で役に立つこと] [そ	
	の他:]	
VII	大学の授業に満足していますか?	(4 段階)
		満足している
		やや満足している
		あまり満足していない
		満足していない
VIII	大学生活を総合的にみて、満足していますか?	同上

調査結果を以下の手続きで分析し考察を行った。まず、記述統計を行い、各調査項目に関する回答の傾向をまとめた。次に、2020年度に卒業した4学科の4年生の学年ごとの平均成績と卒業時アンケート調査の回答との関係性を分析した。最後に、分析の結果に基づいて学修者の観点から大学の教育課程の学修効果を究明し、その課題及び改善策を検討した。

調査結果の妥当性と信憑性を保障するために、卒業時アンケート調査の回答と成績において欠損値があったサンプルを全て分析対象から除外した。なお、SPSS Statistic を用いてデータの統計的処理を行った。

Ⅳ. 調査の結果と考察

1. 回答の状況

2020 年度の卒業時アンケート調査の回答状況は、表 2 に示す通りである。4 学科の卒業生の全員を対象としたアンケート調査として、87 名の卒業生から有効回答があったが、回答者数が当年度の卒業生の約半分しか占めないため、卒業時アンケート調査の結果を一般的な傾向として捉えることに慎重

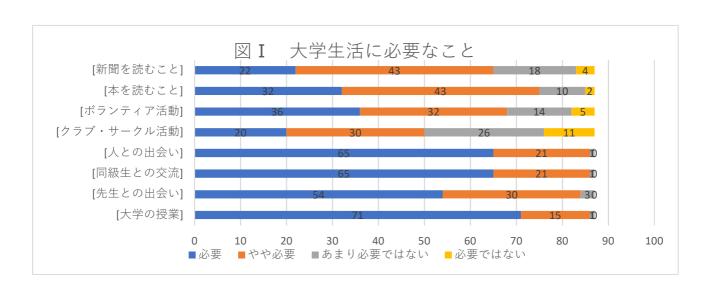
さが求められる。また、4年間の学士課程教育の学修効果を確認し、学士課程の改善を図る意味では、 学生の大学評価に関するデータの継続的な収集、データベースの構築と蓄積、データの定期的検証と いった本学の喫緊の課題が浮上してくる。

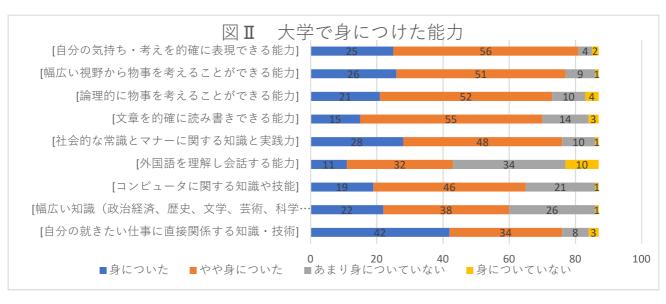
	学科	人間発達学科 心理福祉学科		健康栄養学科	グローバル・スタディーズ	合計						
	子什	(38)	(32)	(69)	学科(42)	(181)						
•	回答者 数	20	18	36	13	87						

表 2 2020 年度卒業時アンケート調査の回答者数

2. 回答の結果

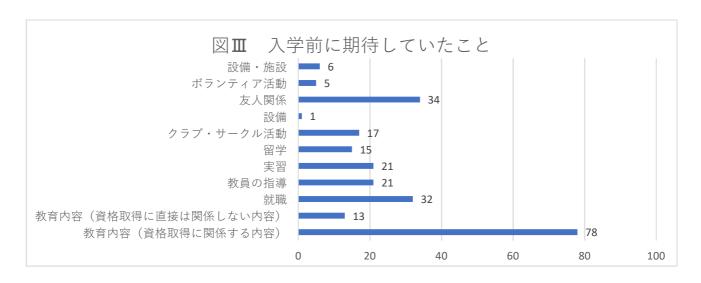
卒業時アンケート調査における学生の回答を調査項目ごとに数値化し、4 年間の学士課程教育に対する学生の評価の傾向をまとめる。

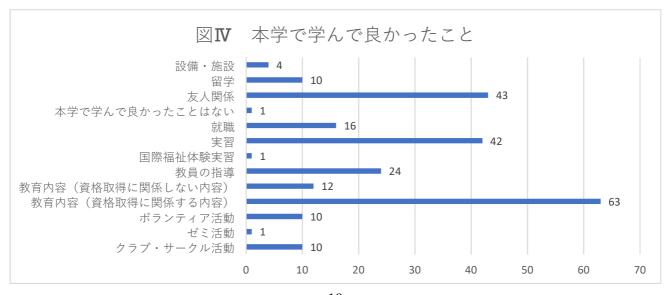




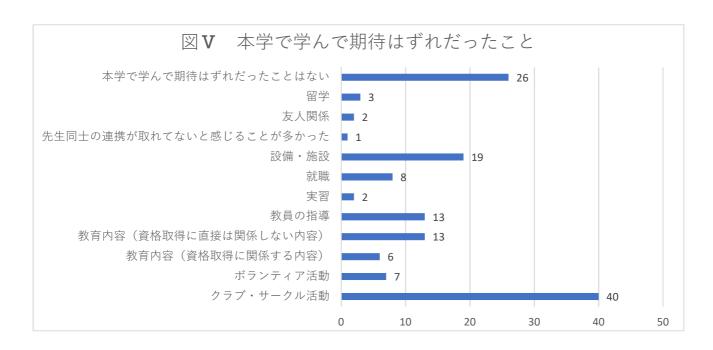
4年間の大学生活を振り返り、学生がどの分野を意識して過ごしてきたかに関する回答は、図 I に示す通りである。図 I からみれば、「人との出会い」「同級生との交流」「大学の授業」を「必要」「やや必要」と回答した卒業生が合計 86名、「先生との出会い」を「必要」「やや必要」と回答した卒業生が合計 84名いたことがわかる。特に、「大学の授業」を「必要」と回答した学生が最も多く、71名であった。この結果から、2020年度の卒業生は、主に「大学の授業」と「教員や学生同士との関係」に重みを置いて、大学生活を過ごしてきたことが推測される。

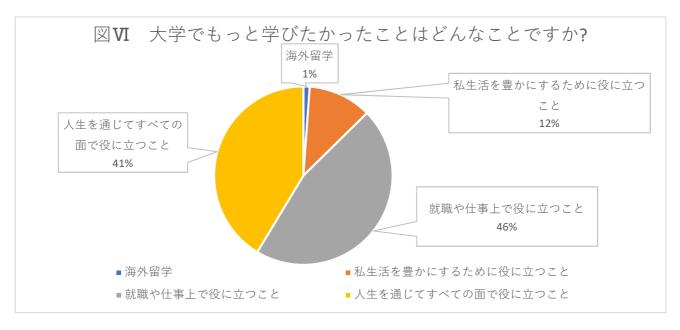
卒業生が4年間の学士課程教育を通して身につけた能力に対する自己評価は、図IIに示す通りである。図IIの回答からみれば、回答のあった卒業生では、[自分の就きたい仕事に直接関係する知識・技術]が「身についた」学生が42名で最も多かったこと、[自分の気持ち・考えを的確に表現できる能力]が「身についた」又は「やや身についた」卒業生が81名で、合計値として最も多かったことを確認することができる。また、[社会的な常識とマナーに関する知識と実践力]と[幅広い視野から物事を考えることができる能力]が「身についた」卒業生は、それぞれ28名と26名で、比較的に多くいたことがわかる。この結果から、2020年度の卒業生が主に[自分の就きたい仕事に直接関係する知識・技術]という専門的な能力と、[自分の気持ち・考えを的確に表現できる能力]という汎用的な能力の獲得を学士課程の学修効果として自己評価したことが読み取れる。





図Ⅲからみれば、本学に進学するにあたって、学生が最も期待したのが、「教育内容(資格取得に関係する内容)」(78名)で、その次に期待したのが、「友人関係」(34名)と「就職」(32名)であったことがわかる。また、図Ⅳからみれば、本学での学びに対する自己評価では、学生が、「教育内容(資格取得に関係する内容)」(63名)と「友人関係」(43名)と「実習」(32名)にプラス志向の価値づけをしたことがわかる。図Ⅲと図Ⅳの結果から、学生が本学時に本学へ期待したことが、卒業時までに実現されていることを一定の程度確認することができる。これによって、本学の学士課程教育の達成度を一定の程度で確認することもできる。

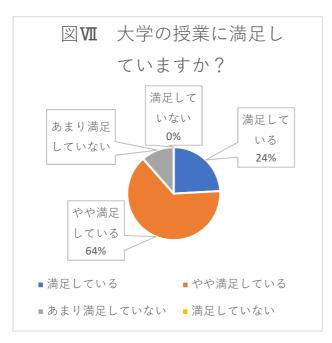


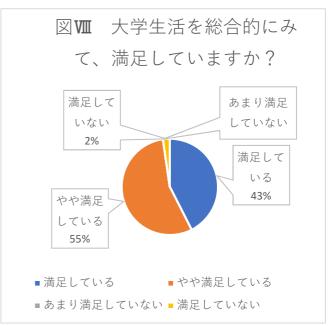


しかし、図Vから本学の学士課程教育の課題を確認することもできる。例えば、「本学で学んで期待はずれだったことはない」と回答した学生が 26 名いた一方で、「クラブ・サークル活動」と「設備・

施設」に対して「期待はずれ」と回答した学生がそれぞれ 26 名と 19 名いた。また、「教員の指導」について、「期待はずれ」と回答した学生が、僅かだが、13 名もいることは注目すべきである。さらに、本学の学士課程教育の方向性として、特に「就職や仕事上で役に立つこと」と「人生を通じてすべての面で役に立つこと」のできる教育課程の充実や構築が求められていることは、図VIの回答から確認することができる。

大学の授業と大学生活に対する卒業生の満足度は、図VIIと図VIIに示す通りである。回答の内容からは、大学の授業と大学生活のいずれに対しても、高い満足度を確認することができる。





3. 「卒業時アンケート調査」の結果及び大学4年間の成績の関係性

まず、卒業時アンケート調査の問Ⅰ [大学生活に必要な要素]、問Ⅱ [大学で身につけた能力]、問 WI [大学授業の満足度]、問WI [大学生活の総合的な満足度]の回答を数値化し、卒業生の各学年の平均成績との相関分析を行ったが、各調査項目と学年ごとの平均成績との間に有意な相関関係が確認されなかった。ここで、分析の結果を省く。

次に、問 I、問 II、問 II、問 II における回答結果の相関関係を分析した。その結果は、表 3 に示す通りである。比較的に強い相関関係 $(\pm .40 \sim \pm .70)$ と強い相関関係 $(\pm .70 \sim \pm 1.00)$ を、それぞれ赤色と黄色で示している。

表3を全体的にみれば、間Iにおいては、[2 先生との出会い/6 ボランティア活動]が、問IIにおいては、[10 幅広い知識(政治経済、歴史、文学、芸術、科学など)/11 コンピュータに関する知識や技能/13 社会的な常識とマナーに関する知識と実践力/14 文章を的確に読み書きできる能力/15 論理的に物事を考えることができる能力/16 幅広い視野から物事を考えることができる能力/17 自分の気持ち・考えを的確に表現できる能力]といった項目の回答結果は、複数の他項目の回答結果と相関関係をもつことがわかる。これらの項目が最終的に卒業生の大学評価と自己評価に強く寄与することが推測される。

項目ごとの相関関係をみれば、問Ⅱで「10幅広い知識(政治経済、歴史、文学、芸術、科学など)」

を身につけた卒業生は、同時に「12 外国語を理解し会話する能力/13 社会的常識と社会的な常識とマナーに関する知識と実践力/14 文章を的確に読み書きできる能力/15 論理的に物事を考えることができる能力/16 幅広い視野から物事を考えることができる能力/17 自分の気持ち・考えを的確に表現できる能力」を身につけた傾向が確認される。特に、「15 論理的に物事を考えることができる能力」「16 幅広い視野から物事を考えることができる能力」「17 自分の気持ち・考えを的確に表現できる能力」の3種類の力を一緒に身につけるという卒業生の傾向を確認することができる。

また、「11 コンピュータに関する知識や技能」の獲得をはじめとして、「15 論理的に物事を考えることができる能力」などの複数の能力を獲得したかによって、問Ⅶの大学授業に対する学生の満足度が影響されるが、いずれの項目も弱い影響しか果たさないことが推測される。さらに、「大学授業の満足度」と「17 自分の気持ち・考えを的確に表現できる能力」の獲得が、問Ⅷの「大学生活の総合的な満足度」に比較的に強い影響を及ぼすことも確認される。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
1 [大学の授業]	_																	
2 I [先生との出会い]	. 532**	_																
3 Ⅰ [同級生との交流]	. 378**	. 419**	_															
4 I [人との出会い]	. 262*	. 419**	. 683**	_														
5 I [クラブ・サークル活動]	0.099	. 265*	0.066	0. 041	_													
6 I [ボランティア活動]	. 377**	. 510**	. 339**	. 283**	. 388**	_												
7 I [本を読むこと]	. 316**	. 408**	0. 195	0. 161	. 356**	. 418**	_											
8 [新聞を読むこと]	. 244*	. 292**	. 214*	0. 121	. 263*	. 430**	. 587**	_										
9 II [自分の就きたい仕事に 直接関係する知識・技術]	. 363**	. 411**	. 360**	. 265*	0.000	. 368**	. 247*	. 263*	_									
Ⅱ [幅広い知識(政治経 10)済、歴史、文学、芸術、科学 など)]	. 240*	. 308**	-0. 051	0. 141	0. 171	. 351**	0. 189	0. 125	0. 190	_								
11 II [コンピュータに関する 知識や技能]	0. 161	. 358**	0. 102	0. 102	0. 197	. 302**	0.063	0.097	0. 047	. 373**	_							
12 I [外国語を理解し会話する能力]	0. 082	. 318**	-0. 011	0. 162	. 378**	. 347**	0. 182	0. 185	-0. 089	. 454**	. 303**	_						
13 [社会的な常識とマナーに関する知識と実践力]	0. 207	. 388**	0. 156	. 229*	0. 198	. 325**	0. 181	. 273*	0. 173	. 492**	. 477**	. 479**	_					
14 I [文章を的確に読み書き できる能力]	0. 080	. 299**	0. 169	0. 205	0. 111	. 297**	0. 139	0. 184	. 358**	. 473**	. 444**	. 285**	. 600**	_				
15 II [論理的に物事を考える ことができる能力]	. 243*	. 315**	. 228*	. 295**	-0. 001	0. 205	-0. 056	0.061	. 362**	. 411**	. 466**	. 247*	. 454**	. 691**	_			
16 II [幅広い視野から物事を オラステート ばったスポープ	0. 165	. 229*	0. 189	. 227*	0. 070	0. 139	0. 022	0. 082	. 300**	. 416**	. 268*	0. 154	. 378**	. 542**	. 689**	_		
17 Ⅲ [自分の気持ち・考えを的確に表現できる能力]	0. 145	. 233*	0. 138	. 257*	0. 086	0. 139	-0. 013	0. 087	. 226*	. 436**	. 359**	. 246*	. 465**	. 621**	. 715**	. 630**	_	
18 M 大学の授業に満足していますか?	0. 193	. 231*	. 250*	. 292**	0. 154	. 300**	0. 074	0. 135	. 214*	. 301**	. 375**	. 286**	. 264*	. 306**	. 339**	. 247*	. 280**	_
19 Ⅲ 大学生活を総合的にみ て、満足していますか?	0. 153	0. 123	. 312**	. 392**	0. 032	0. 158	-0. 099	0. 083	0. 154	0. 104	0. 173	0. 139	0. 195	. 272*	. 355**	. 271*	. 470**	. 575*

表3 問Ⅰ、問Ⅱ、問Ⅶ、問Ⅷにおける回答結果の相関関係

♥. おわりに

大学教育の質保証を念頭に置き、2021 年度における IR の一環として、学修者の主体性の担保及び学修効果の可視化の二角度から、教育課程の課題及び改善点を検証するという目的を達成するために、2020 年度に実施された「卒業時アンケート調査」の結果と大学 4 年間の平均成績を用いて分析と考察を行った。結果として、2020 年度の卒業生が主に「大学の授業」と「教員や学生同士との関係」に重

^{**}p<.01、*p<.05(両側)

みを置いて大学生活を過ごしていること、「クラブ・サークル活動」と「設備・施設」に対して「期待はずれ」が一定の程度あったが、4年間の学士課程教育を通して、進学時に本学に対する期待をかなりの程度で実現したことが確認された。また、2020年度の卒業生が主に[自分の就きたい仕事に直接関係する知識・技術]という専門的な能力と、[自分の気持ち・考えを的確に表現できる能力]という汎用的な能力の獲得という二つの観点から、学士課程における自身の学修効果を評価したこと、そして、「大学授業に対する満足度」と「自分の気持ち・考えを的確に表現できる能力」の定着度をもって、「大学生活の総合的な満足度」を評価したことも確認された。

しかしながら、2020 年度の卒業時アンケート調査の回答者数が当年度の卒業生の約半分しか占めておらず、サンプル数の妥当性の観点からすれば、この調査の結果を批判的に判断する必要性が求められる。また、回答者数の状況から、4 年間の学士課程教育の学修効果を確認し、学士課程の改善を図るために、学生の自己評価と大学評価に関するデータを継続的に収集し、定期的に検証しなければならないという本学の喫緊の課題も確認された。